陰中央新報　（第3種郵便物認可）

今、輝いている 島根の高校演劇

12年間で全国大会に11回

＜洲浜　昌三＞

今、島根の高校演劇が輝いている。この12年間で夏の全国大会へ8回出場した。さらにこの6年間で春の全国大会に3校が出場している。山陽勢の高校も伝統と実力があり、完成度の高い劇を創る。それを越えて代表に選ばれることは至難なことであり、称賛に値する。

全国の高校演劇部は2千以上ある。大会は地区からはじまり、県大会、ブロック大会を経て、11校が夏の全国高校演劇大会へ出場する。1校しかない枠を目指して、毎年中国ブロックでも5県の代表11校が覇を競う。最優秀賞を逃した次点の学校にも発表の機会を与えるために、2007年から春の全国大会も設けられた。

第1回の全国大会は1955（昭和30）年に東京で行われた。今年の茨城大会で60回になる。全国大会には、68年と71年に江津高校、82年と96年に浜田高校が出場した。現在、石見地方の演劇部は浜田高校だけ（明誠高校に昨年同好会が発足）になったが、当時は多い時には10校前後あり、大会も石東、石西に分けて開催し活気があった。

その後は2003（平成15）年の第49回に松江工業高校が出場し、06年からは3年連続、三刀屋高校が出場、さらに10、12年にも全国の舞台に立った。顧問の亀尾佳宏は「山月記」で特別賞、「笑い女」と「オニンぎょ」で創作脚本賞、「暮れないマーチ」で優秀賞を受け、選抜されて2度国立劇場の舞台を踏んだ。昨年と今年は出雲高校が顧問の伊藤靖之の脚本で長崎と茨城で斬新な舞台を披露した。春季全国大会では、09年に三刀屋、12年に安来、13年には松江工業が選抜されて感動的な劇を上演した。

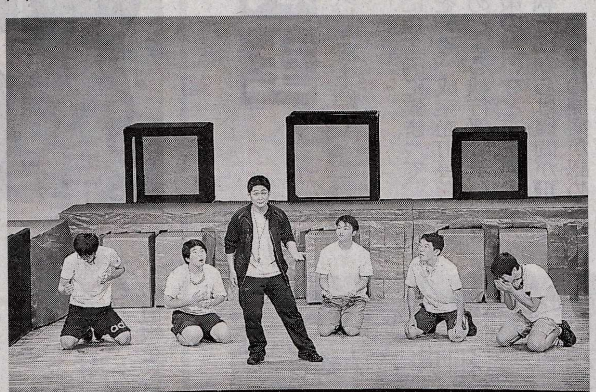
今年は中国大会が松江の島根県民会館で12月20、21の両日に開催される。それに先だって11月初旬に島根県大会が開かれ、地区代表9校が素晴らしい劇を上演した。講師審査員として参加したので、その一端を紹介したい。

出雲高校の創作劇「泳げWATER BABYS」（伊藤靖之作）は着想が斬新で胎児たちが主人公。詩的な象徴性にあふれているが、創意工夫された装置を生かし、具体を通して「生きる」ことを感動的に訴えた骨太な力作。上質なユーモアや風刺もあり楽しく観ながら心を打たれた。松江工業高校の「広くてすてきな宇宙じゃないか」は荒唐無稽な劇だが、伸び伸びと演じて楽しく、最後には「虚から実」が生まれ感動を与えた。特に舞台装置が工夫され劇が見事に立ち上がった。安来高校「逝ったり生きたり」（東尾咲作）は二人が中心の劇だが、よくしゃべって動き回り「今生きている素晴らしさ」をダイレクトに伝えた。

掛合分校は初出場ながら劇の構成がうまく後半には迫力があった。三刀屋高校はしっかりした演技で見せ、松江農林高校は実習をテーマに顧問創作の爽やかな舞台、浜田高校は自然でリアリティーのある演技で往年復活を思わせ、部員40人近い松江商業高校はミュージカルを豊かな表現で観客を楽しませた。開星高校は破局を修復する仕掛けから生まれる愛のてんまつを、気持ちよくまとめて一つの世界を見せた。

前記3校が中国大会に出場する。各校の劇は高校生らしい新鮮な感動を与えてくれるにちがいない。

（全国高校演劇協議会顧問　劇研「空」代表）



「泳げWATER BABYS」を演じる出雲高校演劇部の部員

「広くてすてきな宇宙じゃないか」を演じる松江工業高校演劇部の部員